

金正恩総書記の指導のもと、自衛力強化に成功した朝鮮 —地域および世界への影響力

ロシア、ティンダ・チュチェ思想研究協会会長
ゲンナジー・アスタコフ

2023年7月12日、朝鮮民主主義人民共和国戦略武力の強化発展において今一つの意義深い大きな出来事が生じました。新型大陸間弾道ミサイル「火星砲—18」型の試射が行われたのです。

朝鮮民主主義人民共和国国務委員長である金正恩総書記が試射を指導しました。

このミサイルは朝鮮民主主義人民共和国戦略武力の核心主力手段として朝鮮民主主義人民共和国の自衛力を強化するための朝鮮労働党中央軍事委員会の戦略的意図と重要な決心によって敵対勢力の危険極まりない軍事的策動を確実に抑制するために開発されたものです。

今、人類は非常に複雑な時期を経ています。米国とその追随国の軍事的挑発がいつに無く増えました。朝鮮半島と地域における軍事的安定状況は核危機の赤信号が付いている状態です。

今年の4月、米国は「ワシントン宣言」を作り上げました。これは米・日・南朝鮮の「3者核同盟」の母体となる米国・南朝鮮「核協議グループ」会議を通じて、朝鮮民主主義人民共和国に反対する核兵器の使用を合意した核戦争計画です。

米戦略資産の「可視性」増大の美名のもと、米国は極めて挑発的な空中スパイ行為に執着しています。米国は40年目に初めて戦略核を搭載した米核潜水艦を南朝鮮に投入して朝鮮半島に核兵器を再搬入しようと画策しています。

現情勢は朝鮮民主主義人民共和国をして敵対勢力の無謀な政治軍事的挑発を抑制し、自らを鉄桶のごとく防衛するための自衛力の強化にさらに拍車を掛けることを求めています。

新型大陸間弾道ミサイルの試射は共和国の戦略核武力をさらに高度化することに目的を置いた必須的の工程です。試射は敵に軍事的選択の危険性と無謀さを再度明白に認識させるための朝鮮民主主義人民共和国の強力な行動的警告となります。

試射は新型大陸間弾道ミサイル兵器システムの技術的信頼性と運用の正確さを再確認することに目的をおいて行われました。試射は周辺国の安全を保障し、それにいかなる否定的影響も与えないように行われました。

発射されたミサイルは最大頂点高度 6648.4 キロまで上昇し、距離 1001.2 キロを 4491 秒飛行して朝鮮東海の公海上の目標水域に正確に着弾しました。

試射を通じて確証を得た全ての新記録は、新型戦略兵器システムの能力と信頼性、軍事的効用性の証左となり、共和国核戦略武力の信頼性にたいする疑う余地もない検証となります。

国家核武力の建設展望計画によって朝鮮民主主義人民共和国の軍隊は新型大陸間弾道ミサイル「火星砲—18」型兵器システムも装備するだろうし、国家の安全を頼もしく守ることになるでしょう。

金正恩総書記は試射の結果に大満足を表しました。総書記は新たな戦略兵器システムの試験で大成功を成し遂げた国防科学研究部門のすべての科学者、技術者に熱烈な祝賀と感謝のあいさつを送りました。偉大な朝鮮人民が祖国解放戦争（1950—1953）で米国の「強大性」の神話をことごとく打ち壊して勝ち取った勝利の意義深い 70 周年を控えて発射試験が成功したのは、永遠の勝利の歴史を時代と未来の前に約束する象徴的な出来事です。

総書記は共和国核戦力の強化を力強く推進するために国防科学部門の前に提起される課題を示しました。

日本は外交的経路を通じて朝鮮民主主義人民共和国に抗議を表しました。それについて 7 月 13 日、朝鮮民主主義人民共和国常任代表キム・ソンはこの問題と関連した国連安保理事会で、ミサイル試験は国連憲章に従う人民共和国の自衛権の行使であると宣言しました。

一方、7 月 14 日、朝鮮労働党中央委員会金與正副部長が談話を発表しました。談話では「朝鮮民主主義人民共和国に反対する米国のもっとも敵対的でもっとも脅威的な核対決政策を徹底的に鎮圧、挫折させることは、朝鮮半島とアジア太平洋地域を恐ろしい核戦争の被害から救うための自衛権の行使となり、誰も朝鮮民主主義人民共和国の新型大陸間弾道ミサイルの打ち上げにたいして言いがかりをつける権利がない」と言及されました。

金與正副部長は米国の独断主義を力で押しとどめようとする朝鮮の試みが朝鮮半島で平和と安定を保障するために協商よりもっと効果的な方式であるといいました。朝鮮中央通信社は「米国が数日前、心細くなって観測した朝鮮民主主義人民共和国の 7 月 12 日、大陸間弾道ミサイルの発射は、朝鮮民主主義人民共和国がすでに展開した軍事的攻勢のスタートに過ぎない」といった金與正副部長の談話の内容を引用しました。

副部長はまた、米国が「朝鮮民主主義人民共和国に挑発をする愚かなことをしてはいけない、それは彼ら自身の安全を脅威することになるからだ」といいました。彼女は「われわれは朝鮮半島で平和と安定を破壊し、人民の安寧を威嚇し、国家の自主権と領土保全を侵害するいかなる行為にも断固として対応する準備ができています」と明らかにしました。

ロシア連邦外務省は米国はその同盟国が朝鮮民主主義人民共和国をしてミサイルを発射するようにさせていると見ています。外務省副相アンドレイ・ルデンコは、平壤がそういう方法で西側の行為に反応していると宣言しました。彼は「われわれの立場は知られている、われわれはミサイル発射と他の軍事的準備活動が米国とその同盟国の行為にたいする反応であるとするということを再度明らかにした、米国とその同盟国は実際、北朝鮮が自己の国防力を強化するようにさせている」と言及しました。

自負をもって強硬に敵と対話をするのは自分と自国人民にたいする確信をもった強い国家指導者の資質です。朝鮮民主主義人民共和国の指導者たちは抗日革命戦争と祖国解放戦争（1950—1953）で勝利を収めた後、時代の要求に合致する強力な武力を建設しました。

朝鮮民主主義人民共和国を導く金正恩総書記が武力建設で収めた業績の偉大さは、総書記が先代の領袖たちである金日成主席と金正日総書記の国家自衛力の強化偉業を確信をもって、頼もしく受け継いでそれをチュチェ思想に基づいて全面的に発展させたところにあります。

朝鮮民主主義人民共和国の偉大さはこのようにその指導者たちの賢明な政治と国の勇猛な武力の戦闘力の完成に基づいています。

金日成主席の業績

強い革命軍隊をもってこそ、武装した帝国主義者を打ち破って革命で勝利することができ、国と民族の運命を自主的に開拓しようというのがまさに金日成主席（1912—1994）が明らかにした銃剣重視思想、軍事重視思想の本質です。主席は1932年4月25日、朝鮮人民軍の前身である朝鮮人民革命軍を創建しました。主席が導いた朝鮮人民革命軍は、国家的後方や正規軍の支援がない困難な条件で日本侵略者とたたかいを繰り返して1945年8月15日、朝鮮を解放しました。

金日成主席は国が解放された後、朝鮮人民革命軍を正規的な武装力に建設する方針を示し、その実現のための活動を賢明に導きました。

それで1948年2月8日、正規的な朝鮮人民軍の創建が宣布されました。

主席の傑出した指導は創建されて間もない朝鮮人民軍が祖国解放戦争（1950—1953）で世界的な「強大さ」を自称していた米国を頭とする帝国主義連合勢力の侵略から祖国の自由と独立を誉れ高く守り抜くようにしました。

金正日国防委員長の業績

金日成主席のすべての資質を体現した金正日総書記は傑出した先軍総帥であり、非凡な軍事的英知と抜きん出た戦略的機知の持ち主でした。

総書記は驚くべき洞察力とすぐれた先見の明を備えていました。

総書記はすでに発見された現象の中に隠れている本質を瞬間に解明しました。

総書記はまだ誰もが発見できなかった軍事的情勢の些細な変化でも遠い将来とそれが招く結果を見通して適切な対策を講じたりしました。

総書記が率いる朝鮮人民軍はいかなる敵の大軍も敢えて襲い掛かることができない威力ある攻撃手段と近代的な防御手段を兼備した不敗の強軍に強化されました。

頑強さと決断性、非凡さで特徴づけられる総書記の戦略的機知は「超大国」と自称する米国との軍事的対決で朝鮮民主主義人民共和国が誇示した不敗の力の根本的保証となりました。総書記は現情勢を明哲に分析し、人民軍部隊を絶えず視察しながら朝鮮人民軍軍人に敵を一撃のもとに打ちのめすことのできる優れた作戦方案と戦略戦術のおよび戦闘手法を教えました。

朝鮮戦争後、米国の武装スパイ船「プエブロ」号事件と米国大型偵察機「EC-121」号事件（1960年代）、「板門店事件」（1970年代）、核対決（1990年代と2000年代初）のような米国との厳しい対決時に毎度朝鮮民主主義人民共和国の軍隊と人民は連戦連勝を成し遂げました。これは優れた先見の明で醸し出された情勢と環境を正しく分析し、それに相応しい措置を講じたし、非凡な英知と誰も想像できない出色の手法で敵の弱点を打撃して屈服させた偉大な先軍総帥の傑出した指導の結果です。

金正恩最高司令官の業績

今日、朝鮮人民軍の首位にはもう一人の偉大な総帥である金正恩総書記がおられます。総書記のエネルギッシュな指導によって朝鮮人民軍の威力は最上の境地に引き上げられました。

総書記は優れた軍事的眼識で金日成主席と金正日総書記の軍事戦略思想を深化発展させて米国との鋭い対決で主導権を握り、連勝を取っています。総書記は軍部隊にたいする絶え間ない視察を行いながら軍種、兵種および専門兵の専門家を驚嘆させる非凡な戦闘作戦方案を示し、米国と他の敵対勢力の圧力を抑制させながら朝鮮民主主義人民共和国の核保有国としての地位を強固にしています。

今日、世界政治界は金正恩最高司令官を誰よりも胆力と信念が強い指導者として認めています。世界がどういう方向に変わろうとも、自主の道、社会主義の道に沿って最後まで進むというのが総書記が宣言した確固たる意志です。総書記はいかなる大敵にも恐れず、敵の強硬を超強硬でもって断固粉碎します。敵が大規模の軍事訓練をくり広げていた一触即発の瞬間にも総書記は最前線の哨所を視察しました。総書記は国家の領空を開放した状態でも飛行士たちの盛大な大会を召集しました。これらはすべて総書記の信念と胆力がいかに強いものであるかをよく見せています。

金正恩総書記の指導のもとに、朝鮮民主主義人民共和国は 2017 年から射程 5.5 キロ以上の弾道ミサイルを 10 余回実験しました。2022 年にその回数をもっとも多かったです。今年、朝鮮民主主義人民共和国はすでに数回にわたってミサイルの打ち上げを行いました。

総書記は先代領袖たちの用兵術のすべての特徴を体現しています。総書記の用兵術の特徴は主に遠大な意図と気高い品格で軍人大衆の考えと感情、心をとらえ、一心団結した強兵の勝利を常に保証するということにあります。

総書記の指導のもとに朝鮮人民軍のすべての軍人は思想的・精神的および軍事的・技術的にしっかり準備した不敗の闘士に育ちました。

代を継いで偉大な総帥たちの指導を受ける朝鮮人民軍は常に勝利のみを収めるでしょう！

最近、米国は朝鮮半島でまる一回の戦争を行ってからも余るほどの膨大な武力と最新の武装装備を動員して各種名称の大規模合同軍事演習をくり広げながら核戦争の暗雲をもたらしています。しかし、朝鮮民主主義人民共和国の自主権と社会主義、地域の平和と安全は頼もしく守られました。国際社会はこの事実を通じて反帝闘争で常に連戦連勝を成し遂げている朝鮮人民軍の実際の威力をより切に感じています。

朝鮮人民軍は革命の柱、主力部隊としての大きな威力を轟かせながら国の政治思想陣地を全面的に強化することに大きく寄与しました。

周知のように去る世紀の末、一部の国で社会主義が崩壊した基本原因はそれらの国の軍事および経済的潜在力が弱いところにあったのではありません。それは政治思想陣地が弱いところがありました。

しかし、朝鮮社会の政治思想陣地は一つの思想に基づいた人民と人民軍将兵の統一団結によって全面的に強化されました。

朝鮮民主主義人民共和国で伝統的な軍民一致は代を継いで新たな高さへと上昇しています。人民と人民軍将兵は単に助け合い、導き合うのではなく、思想的・精神的に、闘争気風で一致されています。

今日、朝鮮民主主義人民共和国における軍民一致について特別に強調するようになります。人民と人民軍将兵の思想と闘争気風の一致は朝鮮社会の政治思想陣地を一段と強化しました。鉄桶のごとく強固な政治思想陣地は社会主義朝鮮が歴史の厳しい試練の中でも屈することなく勝利するようにします。

朝鮮人民軍は社会主義建設においても革命の主力軍として絶え間ない奇跡と輝かしい偉勲を創造しています。

「祖国の防衛も社会主義建設もわれわれが引き受けよう！」まさにこのスローガンを朝鮮人民軍軍人が掲げています。彼らはこのスローガンを高く掲げて数多くの鉱山と炭

鋸を開発し、発電所を建設し、工場、企業所、学校、病院、劇場を建設しました。彼らは戦後の復興建設と社会主義建設、強国建設の主要部門で常に前途を切り開き、祖国の富強のための永遠な土台を築きました。

彼らの戦闘的な労働によって 2013 年の 1 年だけでも世界的水準の紋繡遊泳場と美林乗馬クラブなど、大衆文化情操生活拠点と玉流児童病院など、新たな医療サービス総合体が建設されました。科学者、技術者のための銀河科学者通り、金日成総合大学教育者住宅と人民の幸福のための多くの建築物はすべての軍人の勤労の偉勲の結果として、そこには彼らの汗がしみています。

世界的水準の馬息嶺スキー場も軍人たちが建設したものです。あのように大きな対象の建設は普通 10 年以上はかかるが、建設者たちは非常に短期間に前例にない「馬息嶺速度」を創造して立派に完成しました。

金正恩総書記は新しく建設された馬息嶺スキー場を見て回り、人民軍が実に大きなことをやり遂げたとし、彼らの偉勲を高く評価しました。

朝鮮人民軍と国の勝利の歴史は続くでしょう。その歴史の輝かしい 1 ページは朝鮮民主主義人民共和国が堂々たる宇宙強国に浮上したことを記録しています。

2016 年 2 月 7 日、朝鮮民主主義人民共和国が地球観測衛星「光明星—4」号を打ち上げたという消息は世界言論の関心を集め、国際社会を震撼させました。

なぜでしょうか。人間が人工衛星を打ち上げた歴史は 65 年以上に達します。地球上の少なからぬ国々が自己の人工衛星をもっています。ところが、なぜ朝鮮民主主義人民共和国の衛星発射がこういう世界的な波紋を起こしたのでしょうか？

それは第一に、朝鮮が最悪の条件で人工衛星を打ち上げることができたという事実が実際的に信じがたいからです。朝鮮民主主義人民共和国は大きくない国です。それに国際的な制裁と米帝とその追随勢力の封鎖が続いている状況下でこの国が存在すること自体が奇跡となっています。

世界を見るならば、朝鮮民主主義人民共和国のように、「国際警察」と自称する米国とその追随国、米国の機嫌をとりながら生きていく国々からあのように過酷な制裁と封鎖を受けた国はもうありません。人工衛星の打ち上げは明白に主権国家の自主的で合法的な権利です。宇宙の平和的利用は今日の世界ですべての国、各国の志向、一般的な現実となっています。しかし、米国とその追随国は朝鮮でだけ全的にこの堂々たる権利を奪おうと狂奔しています。朝鮮が衛星を打ち上げるたびに彼らは国連安保理会議で「制裁決議案」をでっち上げて朝鮮民主主義人民共和国の経済とこの国の公民の生存を圧殺しようとしてきました。まさにこのような状況下で朝鮮が再び人工衛星を打ち上げたのです。これは朝鮮民主主義人民共和国の前途にネックとなっているすべての悪者と朝鮮人民の幸福な生活と朝鮮の発展を望まず恐れるあらゆる敵対勢力に朝鮮の力と胆力がどう

いうものであるかを再度はっきり示しました。

第二に、朝鮮の宇宙開発の速度が非常に速いからです。

人工衛星「光明星—1」号の成果的打ち上げ：1998年8月

人工衛星「光明星—2」号の成果的打ち上げ：2009年4月

人工衛星「光明星—3」号の2号機の成果的打ち上げ：2012年12月

人工衛星「光明星—4」号の成果的打ち上げ：2016年2月

これは宇宙強国を志向する朝鮮民主主義人民共和国の継続的な発展ぶりを見せる直観図表です。

1990年代に行われた人工衛星「光明星—1」号の成果的打ち上げに全世界が驚嘆していたことが思い浮かびます。当時、全世界の社会主義の敵はソ連と一部の東欧社会主義諸国が崩壊したのを奇貨として地球上から社会主義を完全に抹殺しようという目的のもとに朝鮮を狙った全面的で集中的な騒動を起こしました。それによって朝鮮民主主義人民共和国はもっとも厳しい試練を経験しなければなりませんでした。

その時から20余年が流れましたが、その間、朝鮮民主主義人民共和国は宇宙開発で歴史の浅い国から強国に大飛躍を起こしました。実験用人工衛星を2回打ち上げた後、地球観測衛星の打ち上げによって飛躍したのです。傾斜軌道衛星から極軌道衛星に急激に発展しました。

第三に、朝鮮民主主義人民共和国は真の宇宙強国だからです。

世界には人工衛星を打ち上げ、自己の衛星を持っている国が少なくありません。しかし、自己の発射場をもって自己のキャリア・ロケットで衛星を指定された近い地球軌道に直接侵入させる国は指を折るほどです。それに人工衛星を製作して打ち上げる国々も部品と技術、専門家の大部分は他国に依拠して解決しています。

しかし、朝鮮民主主義人民共和国は100%自らの力と技術、資源によってすべてをやり遂げました。言い換えれば、朝鮮の人工衛星は小さなねじに至るまですべてが国産製になっています。衛星の製作と打ち上げ、運営に参加した科学者、技術者も全部朝鮮の専門家です。

朝鮮民主主義人民共和国はすでに輝かしい宇宙開発計画を作成し、加速化した速度でその実現を早めました。数日前に行われた打ち上げも2016年に作成した国家宇宙開発5ヵ年計画によるものです。

実に、朝鮮民主主義人民共和国は堂々たる宇宙強国です！

国家指導者にとって国と民族の自主権と尊厳、人民の運命と安全を守ることよりもっと重要な事業はありません。

金正恩総書記は世界的な大政治動乱、帝国主義者の軍事的圧力と恐喝の中でも自主の道、社会主義の道に沿ってまっすぐに前進しなければならないということを確認たる政

治的信条としています。まさにここに朝鮮革命の万年大計の戦略、終局的勝利があります。

総書記はこの路線を寸分の狂いもなく堅持しています。

総書記はアメリカと敵対勢力の挑戦と核脅威を粉砕し、朝鮮半島と世界の平和と安定を固守しています。総書記はいかなる侵略者も襲い掛かることができないように政治思想強国、軍事強国の威力を全面的に強化しながら国家指導者として人民とのもっとも大きな約束をもっとも立派な境地で守りました。

今も、総書記は朝鮮人民をこの世でもっとも幸福な人民にならしめるという崇高な約束を守るために、社会主義文明建設のために不眠不休の労苦を捧げています。すべての朝鮮人は総書記を絶対的に信頼しており、総書記の指導に一心同体となって忠実に従っています。

総書記の指導のもとに朝鮮民主主義人民共和国は核大国にもなりました。朝鮮では総6回の核実験が行われました。

第1回核実験

2006年10月、朝鮮民主主義人民共和国は初めて核実験に成功したことを宣布しました。世論はこの驚異的な出来事を特筆大書して報じました。この出来事は朝鮮民主主義人民共和国との鋭い核対決に出たのがほかならぬアメリカであったため、彼らが一番不安になっていました。

大洋越しの国ではこの出来事をいわゆる「脅威」「合意違反」などと言いながら沸きたっていたが、朝鮮民主主義人民共和国では全国が核実験の成功を祝賀する熱意で沸いていました。

世論が発表した2006年の10大ニュースには「朝鮮民主主義人民共和国における核実験の成功」が載せられました。

第2回核実験

2009年、暖かい春の息吹の中でこの国は再び国際社会の耳目を集めました。4月5日、「光明星-2号」に命名された人工衛星が打ち上げられたのです。

アメリカとその手先は衛星の打ち上げを国連安保理にもちだして誰かを糾弾するという「議長声明」を採択するようにしました。

朝鮮民主主義人民共和国は国連安保理が宇宙の平和的利用に関する主権国家の権利を侵害したことにたいする謝罪を要求しました。そうしないと、核実験をはじめ、すべての補充的な自衛的措置を講ずると嚴重に警告しました。

朝鮮の宣言は決して空言ではありませんでした。5月25日、朝鮮民主主義人民共和国は第2回核実験を断行しました。当時、中国新聞「環球時報」は「朝鮮の核問題が忘れられたのか？」と題してこう評しました。

「つまるところ、朝鮮の核およびミサイル計画が新たな発展段階に到達したということである」

第3回核実験

2013年2月12日に行われた第3回核実験はアメリカの挑発によって産生されたものです。2012年12月12日、朝鮮民主主義人民共和国が自己の初の実用衛星「光明星-3」号2号機を打ち上げると、破廉恥なアメリカは自らの下手人をおしたてて再び「強力な制裁」システムを稼働させました。

これにたいする答えとして朝鮮民主主義人民共和国は全面対決を宣言しました。

朝鮮は翌年2月に3回核実験を行いました。

当時、朝鮮民主主義人民共和国政府が宣言した「全面対決」を意味してみれば、核実験はアメリカにたいする最後の攻撃の序幕であるといえます。

それから一ヵ月後、つまり2013年3月、朝鮮労働党は経済建設と核武力建設を並進させるという新たな戦略的路線を示しました。これによって朝鮮労働党は自衛的な核武力を質的、量的に引き続き拡大強化しようとする意志を表明しました。

第4回核実験

第4回核実験は2016年1月6日に行われました。今回は最初になる水爆実験でした。この実験は国際社会に送る意味深長なメッセージでした。

その意味は第一に、朝鮮民主主義人民共和国が核大国の前列に堂々と入ったということでした。それは朝鮮が公認された9カ国核保持国の中でアメリカとロシアを含む5カ国のみがもっている水爆をもっているからです。

その意味は第二に、アメリカがより大きな恐怖と不安で氣力が尽き始めたということです。

朝鮮民主主義人民共和国はすでに公式的に自分の打撃対象を明らかにしました。この国は自分の打撃の最終目標がアメリカの本土であることを隠さずにいます。

朝鮮がもっている熱核弾頭が一つでもアメリカの本土に落ちればどうなるのでしょうか。

第5回核実験

朝鮮民主主義人民共和国は今回は核弾頭爆発実験を行って戦略弾頭ミサイルに装着できるように標準化され、規格化された核弾頭の性能と威力を最終的に検討しました。

これは朝鮮民主主義人民共和国が核戦争の抑止力を備えたということの意味します。朝鮮はすでにICBMの大出力エンジンの地上噴出試験と弾道ミサイルの大気圏再進入シミュレーション、戦略潜水艦弾道弾水中試射などで成功しました。朝鮮人民軍戦略軍火星砲兵部隊の数回の弾道ミサイル発射訓練も成功裏に行われました。

今はその威力を実践で示すことだけが残りました。アメリカの増大する核戦争危険か

ら自己の尊厳と生存権を守ることを使命とする朝鮮民主主義人民共和国の核武力を質量的に強化するための措置がこれからも引き続き講じられるでしょう。

第6回核実験

2017年9月3日、各国の地震観測所では朝鮮民主主義人民共和国の領土で起こった強力な地下衝撃が測定されました。震度は6.1から6.4バールの範囲でしたが、学者は震源が地上表面にあったと公開しました。

朝鮮民主主義人民共和国政府は熱核装薬をした弾頭試験が成功したことについて発表しました。

人民を国防と生産、生活の各分野で新たな成果を収めることに呼び起こす金正恩総書記は天地を揺るがす超強硬の気概を所有しています。

2012年3月、アメリカと南朝鮮の合同軍事演習によって朝鮮半島の情勢は戦争の瀬戸際に追い込まれました。

当時、金正恩総書記は敵味方が対峙している軍事境界線付近の板門店を視察していました。総書記はこれから戦争が起これば、敵が膝を屈して停戦協定調印ではなく、降伏文に判子を押すようするだろうと述べました。これと関連して南朝鮮の言論は「世界を揺るがした胆力の示威」「青天の霹靂のような消息にみんなが驚嘆した」「アメリカのホワイト・ハウスと青瓦台が空中で粉々に爆発するのを見るようであった」と伝えました。2012年12月、人工衛星「光明星-3」号2号機の打ち上げ前にアメリカとその追隨勢力はこれから予見される朝鮮の衛星の打ち上げが「ミサイルの打ち上げ」だといい、「制裁」と「迎撃」で脅威しました。

金正恩総書記は直接現地で衛星の打ち上げの全過程を指導しました。

アメリカはとうとう新たな国連「制裁決議」をでっち上げて朝鮮に核の歯をむき出しにしました。朝鮮民主主義人民共和国はそれにたいする答えとして2013年2月第3回核実験を行いました。これに続いて総書記は2013年3月朝鮮人民軍戦略ミサイル軍の火力打撃任務の遂行と関連した作戦会議を非常招集し、火力打撃計画を最終検討、批准しました。火力打撃圏内にはグアム島とハワイ、ひいては米本土にある軍事基地が入っています。

総書記はこのように世紀を継いで持続された朝米対決に終止符を打つ重大な決心を宣布しました。

世界は驚きました。数世紀にわたって他の国々を侵略し、暴力と専横をこととしてきた「唯一超大国」であるアメリカの本土に打撃を加える計画まで公開する胆力をもった国がいままではなかったからです。必要なら「超大国」と核戦争をしてでも地球上で悪の根源を一掃するという胆力と意志を備えた総帥をまだ誰も知りませんでした。

総書記は無比の胆力をもって今にでも新しい戦争が起これば、降伏文に判子を押す者

もないように全滅させるとし、人民軍軍人の戦闘訓練を指導しています。総書記は公式席上で朝鮮民主主義人民共和国はアメリカが願う任意の形態の戦争や戦闘作戦にも自信をもって反応できる、共和国は常用戦争であれ、核戦争であれ、いかなる戦争にも対応できるという完全な準備態勢にあると宣言しました。

2016年3月、金正恩総書記は核の兵器化活動を指導しながら核先制打撃権は決してアメリカの独占物ではない、アメリカ帝国主義がわれわれの自主権と生存権を核で脅威し、襲い掛かるときにはためらいなく核で先に攻撃するだろうと述べました。

南朝鮮と西側諸国の言論は「金正恩最高司令官は多くの場合、特異な措置を講じ、想像を絶する選択をし、予見したことよりもっと威力で攻撃的かつ巧みな戦略をもっている」「金正恩最高司令官は外部勢力の圧力に絶対に屈せず、対米強硬措置を連続的にとり、全世界的な称揚を受けている」と評しました。

朝鮮民主主義人民共和国の金正恩総書記は現世界でもっとも若い国家指導者です。総書記の精神は国際社会の関心を集中させています。